

妙法寺だより

今を生きる智恵と勇氣ともに学び歩むお寺

VOL.261

秋彼岸号

9

2025 AUTUMN
季刊誌2025年9月発行



- ・ 秋季彼岸会法要
- ・ 宗祖御入滅報恩会式
- ・ 住職のCoffeeTime 「自分らしさに遠慮しない」
- ・ 9月浄心道場のご案内
- ・ 工事完成報告

秋季彼岸会法要

9月23日 (秋分の日) 午後2時より



～お彼岸のお参りのご案内～



9月20日～9月26日のお彼岸期間中は、ご自由に本堂へご参拝いただき、卒塔婆をお持ちいただけます。

～お彼岸の始まりまでに卒塔婆供養を行っておきます～



卒塔婆のお申込は別紙にて**9月17日着**までお願いいたします。



お彼岸期間中は、お線香と生花の販売を行っております。

お線香1束：100円 生花1対：1500円と2500円の2種類



お彼岸期間中は墓地裏口を臨時駐車場として開放しております。小学校前は朝7：00～8：30までは通行禁止となっておりますので、ご注意ください。

お彼岸に学ぶ「布施」の心

お彼岸はご先祖さまに感謝を捧げる大切な供養のときであると同時に、私たち自身の心と行いを省みる仏道週間でもあります。仏教では「六波羅蜜（ろくはらみつ）」と呼ばれる六つの修行を行うことで、迷いや煩惱にとらわれた此岸（しがん）から、悟りの彼岸（ひがん）へと心を運んでいけると説かれています。いわば「心と生き方の定期検診」ともいえる仏道週間であります。

その六つとは――

- 一、布施（ふせ） 足るを知り、他人に惜しみなく善行を施す心
- 二、持戒（じかい） 規則や規律、自身で決めた約束を守る自身を律する心
- 三、忍辱（にんにく） 思い通りにならないことを受け入れる忍耐の心
- 四、精進（しょうじん） 自分の役割をしっかりと見つめ、励み努力する心
- 五、禅定（ぜんじょう） 心の声に耳を傾け、静かで穏やかな心を保つ心
- 六、智慧（ちえ） 仏様の教えを学び、物事の真理を正しく見つめる心

今回は、その最初に挙げられる「布施」に光を当ててみましょう。

経典には「施しは最上の善根なり、されど報いを求むることなかれ」とあります。施しは仏道において最も尊い行いですが、「見返りが欲しい」という心が混ざってしまうと、その尊さは損なわれてしまいます。私たちがよく「豊かさ」と聞いて思い浮かべるのは、お金や地位、名誉かもしれません。しかし仏教で説かれる豊かさとは「どれだけ持っているか」ではなく「どれだけ分け与える心を持っているか」で、決まります。

たとえば百億円を持っていたとしても「これは全部自分のためだけに使う」と心を閉ざしている人は、仏教的には豊かな人とはいえません。一方で、千円のうち百円を誰かのために施せる人、その心を持つ人は本当に豊かな人です。「布施」はお金に限りません。時間や労力を割いてボランティアをすることも布施です。誰かに優しい言葉をかけること、思いやりの笑顔を向けることも立派な布施行です。日蓮聖人はお手紙の中で、親に高価な贈り物ができなくとも、一日に二度三度笑顔で接することが何よりの親孝行である。と記されています。笑顔という無形の贈り物が、どれほど人の心を温めるかを教えてくださっています。現代社会は「資本主義」という価値観のなかで、「どれだけ多くのモノを持っているか」に焦点が当たりがちです。しかし仏教の示す豊かさは、物の量ではなく、心の質にあります。財産・時間・真心――そのいずれをもつても、他者に分け与えられる心を育むことこそ、彼岸に向かう第一歩なのです。

この秋のお彼岸、どうぞご先祖さまへの感謝とともに、布施の心を日常の中に探してみてください。笑顔で人と接すること、誰かのために少し時間を割くこと――そうした一つひとつの行いが、私たちを彼岸の豊かさへと導いてくれるはずです。



宗祖御入滅報恩会式

しゅうそごにゆうめつほうおんえしき

11/2 日 午後6時より

どなたでもご参加いただけます、皆様のご参加お待ちしております。
お経本や太鼓は、妙法寺から貸し出しいたします。

宗祖日蓮聖人御入滅第744遠忌 開山日昭聖人御入滅第703遠忌

御会式法要の起源

えしき

宗祖御入滅報恩会式は、通称「お会式」と呼ばれ、弘安五年十月十三日に御入滅された宗祖日蓮聖人、そして元享三年三月二十六日に御入滅された妙法寺を開山された日昭聖人の遺徳を讃える法会であります。

左の浮世絵は、天保年間（一八三〇年代）に歌川広重や歌川国貞らが手がけた名所絵集『江戸自慢三十六興』の一枚です。江戸の景観や庶民の暮らし、四季折々の行事を描いたシリーズの中で、大本山池上本門寺の御会式が描かれています。参道には多くの参詣者が集まり、万灯や露店でにぎわう様子が活き活きと表現され、当時の御会式が、江戸庶民にとって大変盛況な祭礼であつたことが伝わってきます。



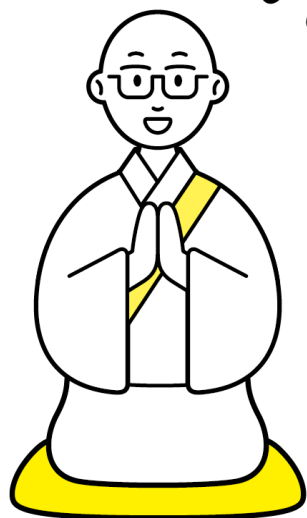
妙法寺の御会式唱題行

おえしきしようだいぎょう

日蓮聖人は、南無妙法蓮華経のお題目こそが成仏への大道であると、そのお題目の布教に一命をかけられました。そのご報恩の思いを込め、妙法寺では「御会式唱題行」と題して、参列の皆さまと共に太鼓を打ち鳴らし、一心に南無妙法蓮華経のお題目をお唱えいたします。お堂を暗くしての唱題は、視界が閉ざされることで自然と音に心を澄まし、声の響きに身をゆだね、より一途にお題目に集中できるひとときとなります。まるで闇を抜けて光を見出すように、唱題の声が心を照らし出してくれます。



住職の



Coffee Time



去る六月十四日、母・正子（妙聲院華璽福施日正大姉）の一周忌を営みました。当日は親戚をはじめ、お寺の役員さん、生前に母と親しくしてくださった友人や、寺院の奥様方など、多くの方々にお集まりいただき、母を偲ぶひとときとなりました。母が亡くなって一年。日々の中で思い出すことも多く、あらためて母の生き方を振り返る機会となりました。今日は、その中で私が学んだことをコーヒータイトムとしてお届けいたします。

台所から生まれる「正子飯」



母はとても料理の上手な人でした。餃子、豚汁、和え物、中華丼、炊き込みご飯。どれも私にとって大好物でありました。ただ母の料理は、単に家族の食卓を満たすものにとどまりませんでした。煮物や炊き込みご飯を作ると、近所や友人にお裾分けをするのが常でした。その方法がまたユニークでして、相手が留守だと郵便ポストにタッパーごと料理を入れて帰ってきてしまう。しばらくすると、「ポストに煮物が入っていたんですが、正子さんですか？」と電話がかかってくる。私は「はい、多分うちの母ですが」と毎回のように答えるのが常でありました。また、お寺の奥様方の会議に出かけるときには、なぜか炊飯ジャーを抱えていく。会場のお寺に着くと「電源を貸してください」とお願いし、会議が始まる前にスイッチを入れる。すると会議が終わる頃には、炊きたてのご飯がで上がる。皆さんびっくりしながらも、楽しみにしていたそうです。さらに、お寺の従業員に昼食をふるまう時には、いつも大盛り。午後の仕事に差し支えるほどの量で、周囲からは「正子飯」と呼ばれるようになりました。

息子としては「困った母」



こうした母の行動は、息子である私にとっては「困ったもの」でありました。予測不能な行動は時に恥ずかしく、何度も「やめてくれよ」と言ったこともあります。ケンカになったことも少なくありません。しかし、母が亡くなって一年、多くの方々から「正子さんのご飯が美味しかった」「会議の時の炊き立てご飯が楽しみでした」と声をかけていただきました。その時になって、初めて気づかされたのです。母のユニークさや大胆さは、周囲の人に喜びを与え、いつの間にか多くの方に愛されていたのだと。

「自分らしさに遠慮しない」という生き方

母の生き方を振り返ると、母は「自分らしさに遠慮しない人」でありました。多くの人は「こんなことをしたらどう思われるだろう」「周りから変に見られないだろうか」と、人の目を気にして自分を抑え、自分の気持ちや個性に蓋をしてしまうこともあるでしょう。けれども母は違いました。周囲の反対があっても、「自分がやりたい」と思ったことを迷わず実行する。その姿は、時に家族を困らせることもありましたが、振り返ればそれが「正子らしさ」であり、多くの人に喜びや驚きをもたらしていたのです。「自分らしさを遠慮せずに生きることこそ、人の心に残り、亡くなった後も語り継がれていくのではないか」と気づかされます。

真の評価は死後に現れる

皆さんはどうでしょうか。「人にどう思われるか」を気にして、自分を抑えてはいませんか。もともと自分らしく、遠慮せずに生きること、人生はもっと楽しく、豊かになるのではないのでしょうか。母の生き方を通じて、私はそのことを強く学ばされました。人の評価は、生きている間に与えられるものではなく、むしろ亡くなった後に周囲の人々の心に芽生える気づきの中にこそ、真の評価があるのだと思います。母・正子が私に残してくれた最大の教えは、まさに「自分らしさに遠慮しない」ことでした。それは人を楽しませ、心を豊かにする力となり、やがて「その人らしさ」として人々の記憶に残っていくのだと感じます。



いちりゅうさいていきょう
一龍斎貞鏡
師匠



ばんちようさらやしき
講談番町皿屋敷

浄心道場

9/7
(日)

1部：午後3時～ 供養会（お経・祈祷・供養）
2部：午後4時～ 法話会（講談 番町皿屋敷）

● 一龍斎貞鏡さんのプロフィール

平成20年：八代目 一龍斎貞山門下に入門 平成24年：二ツ目昇進 令和4年：第77回文化庁芸術祭賞新人賞受賞 令和5年：真打昇進 現在五児の母として芸道と子育ての両立に邁進中

● コメント

江戸三大怪談の一つに数えられます『番町皿屋敷』。我々講談師は「冬は義士 夏はお化けで飯を食い」、夏になりますと怪談噺を申し上げるのが習いでございます。前回の浄心道場で四谷怪談を申し上げた折には、クライマックスで和蠟燭が突如として消えるという現象が。さて、今回はいかがになりますことやら…。皆さま方の目でお確かめくださいませ。

工事完成報告



工 事 前



工 事 後

800年記念事業の寄付の一部を活用させていただき、土砂災害危険区域に指定されている擁壁工事が無事に終了いたしました。ご寄付をいただきました皆様、そして今回施工してくださいましたフューチャー・ランドスケープ様に、この場をお借りして感謝申し上げます。今後、季節をみて植栽を行って参ります。